

Sophocles に於ける呼格名詞句を伴う小辞 δ の用法

高橋 りえこ

1. 問題の背景

屈折言語である古典ギリシア語に於て、呼掛けの表現に呼格が用いられ、その呼格名詞句にはしばしば小辞 δ が付加される。この小辞には高津氏によると次のような通時的変遷が見られる。

『古くから呼格は δ を伴う事が多いが、 δ は本来特別な強意があったものが、次第にその性質を失って、単に呼格に伴う一形式となった。』¹⁾

この記述を補足する形で、古典ギリシア文学史に沿って従来の記述に於ける小辞 δ の用法を整理してみた。

(1)Homerusの頃 (紀元前700年)

この時代は、小辞 δ が付加されない呼格名詞句が広く優勢であったものの元来強調のしるし (Nachdruckzeichen²⁾) であった δ が親密さを表すしるし (Zeichen der Vertraulichkeit³⁾) として平等な立場にあるものに対する呼掛けの表現に用いられていた。このため身分差のある者、例えば人間から神へ、女性から男性へ、召使から主人へといった下位にあるものから上位にあるものへの呼掛けの呼格名詞句には δ は用いられなかった。

(2)Herodotusの頃 (紀元前400年)

この頃になると呼格名詞句への δ の付加は一般的となる。Humbertによると固有名詞や官職名が呼格名詞句に用いられる場合、 δ は用いられないものの臣下の者がその君主に対して δ βασιλεῦ (「王よ」) と呼びかける表現が多く見られるようになった。⁴⁾

(3)Platoの頃 (紀元前300年)

(2)の時代に比べてさらに δ の使用が定着する。このためHomerusの頃のように親し

みを表していたるは、呼掛けの表現に於て慣用化され、その付加は丁寧さを示すだけになった。そのための欠落した呼格名詞句は、逆に反感・怒り・軽蔑・嘆きといった感情の表現と見なされるようになった。⁵⁾

(4)新約聖書の頃 (紀元100年以降)

アッティカ時代に呼格名詞句と共に用いられていたるは、コイネー時代に入ると次第にその使用は減少していき、呼格名詞句から独立した間投詞としての機能のみが残った。⁶⁾

2. 問題点

1. で触れたようにるは主に文脈によりある感情を高めるために付加され、呼格名詞句を構成する名詞及び名詞相当語句により、その使用が限定されると言えるだろう。しかし実際には同じ呼格名詞句にるの付加が見られたり見られ無かったりするため、るの使用を決定する要因が他にもあると考えられる。また従来の研究に於て散文を中心とした記述は為されているが、劇に於ける小辞るの記述が不十分であるように思われる。このため本稿ではるの使用が一般的と見られているアッティカ時代の悲劇作品に於て、如何なる条件下で小辞るが呼格名詞句に付加されるかを、統語論の立場から数量的に調査して、るの用法とその機能に関して考察を行うことにする。

3. 使用テキスト

アッティカ時代を代表する悲劇作家の一人Sophocles (紀元前496~405-6年)の作品の中『オイディプス三部作』と呼ばれている次の三作品をテキストとした。

Ἄντιγόνη (成立年代は紀元前442年) 以下A

Οἰδίπους ἐπὶ Κολώνῳ (推定成立年代は紀元前420年) 以下OK

Οἰδίπους Τύραννος (推定成立年代は紀元前401年) 以下OT

各作品の成立年代は推定によるものもあるが、いずれも紀元前400年代に書かれたものと言える。

4. 方法論

4.1 カードの作成方法

カードは以下の方法により作成された。

1)呼格名詞句は出現する度にカードに書き取る。但し呼掛け以外の叫びや驚愕等の表

現があるので注意を要する。

- 2)呼格名詞句に小辞^らが付加されていれば書き取る。
- 3)呼格名詞句に小辞^ら以外の間投詞が付加されていれば書き取る。
- 4)呼格名詞句内に修飾語句があれば書き取る。
- 5)行及び文中に於ける呼格名詞句の位置を書き取る。
- 6)呼格名詞句が出現する箇所(作品名・会話及び合唱部分の別・行数)を書き取る。

これらはすべて一枚のカードに記入されなければならない。

4.2 カードの選別方法

上記の方法で約400枚のカードを作成した。このうち次に挙げるカードは別個に考えて今回の分析から外すことにした。

1)呼掛けの表現以外の驚愕・怒り等の感情表現。

――主文に於て構文外の主格はしばしば小辞^らや間投詞^らと共に驚きや叫びの表現を為す。主格と呼格が異形であれば形態上の選別は容易であるが、同形である場合、呼掛けかそれ以外の表現かの選別は英語及び日本語訳を照合して行った。

但し主格と呼格が異形であるにも拘らず慣用的に主格と呼格名詞句に使用される場合(例えば主格 *ἄναξ*・呼格 *ἄνα*)は分析例に加えることにする。

2)二者以上の者に対する呼掛け。また *καί* による呼格機能語の列挙。但し呼格機能語の同格表現や重複表現はこの限りではない。

3)話者自身への呼掛け。

――これは1)の呼掛け以外の表現との客観的な選別基準が無いために予め除外しておく。

4)指示代名詞 *οὗτος* を用いた呼掛け。

5)「*ἡμοί* や *οἱμοί*+属格」による呼掛け。

6) *ὅ τάν* のごとく不変化詞を用いた呼掛け。

7)命令法と共に用いられる冠詞付きの主格による呼掛け。

8)小辞^らが呼格以外の格の実詞と共に用いられている場合。

9)この他に呼掛けの表現と見なされない場合。

これらの選別は呼格名詞句に付加される小辞^らを研究対象としているために行われることを明記しておく。

4.3 カードの分析基準

呼格名詞句を伴う小辞^らの用法及びその機能を記述するために、Scott (1903・1904)の記述を踏まえた上で筆者なりに次のような分析基準を設定した。

<統語論的分析基準>

- (1)呼格機能語の品詞。
- (2)呼格名詞句の構成要素数。
- (3)呼格機能語の修飾語の有無。
- (4)文及び行に於ける呼格名詞句の出現位置。

尚、小辞るの使用率及び呼格名詞句の分布状況はすべて小数点第二位を四捨五入した%で示す。

5. 分析結果

5.1

Sophocles の三作品を通して抽出された総計 370例を、小辞るが呼格名詞句に付加されているもの・付加されないもの・る以外の間投詞が付加されるものに分類した結果が<表-1>である。

<表-1>

	分類数	%
るが付加された呼格名詞句	196	53.0
るが付加されない呼格名詞句	158	42.7
る以外の間投詞を持つ呼格名詞句	16	4.3
合計	370	100.0

これによるとるが付加された呼格名詞句と付加されない呼格名詞句の出現率はほぼ等しいことからSophocles に於て小辞るの使用は同時代の散文に比べると一般的化されていないと言えよう。またる以外の間投詞が呼格名詞句と共に用いられることは稀であることが明らかになった。

さらに<表-1>を会話部分と複雑な韻律の組合せで構成される合唱部分に分けて小辞るの使用率を調べてみた。<表-2>において小辞るの使用率は会話・合唱の两部分でほぼ等しく、<表-1>と同様の分布を示している。このことから小辞るの使

用を決定づける直接的な要因が韻律であると断定することは危険であると、筆者には思われる。

< 表 - 2 >

(%)

	会話部分	合唱部分
ゐが付加された呼格名詞句	153 (54.4)	43 (48.3)
ゐが付加されない呼格名詞句	125 (44.5)	33 (37.1)
ゐ以外の間投詞を持つ呼格名詞句	3 (1.1)	13 (14.6)
合計	281 (100.0)	89 (100.0)

小辞ゐに対して、呼格名詞句と共に用いられる間投詞は、会話部分に比べて合唱部分に於て僅かながらその使用率が高くなっている。間投詞のうちゐは会話部分で3例、合唱部分に於て11例見られる。小辞ゐが合唱・会話两部分でほぼ等しい頻度で使用されていることを考え合わせると、間投詞ゐは主に合唱部分で使用され、ゐと使用される環境が異なることが指摘される。

5.2 統語論的分析基準(1)による分析結果

小辞ゐの付加は呼格機能を有する語の品詞と関連があるのではないかという推定に基づいて、呼格機能語の品詞分類を行った。この結果、名詞87.0%・形容詞11.6%・分詞1.4%であった。名詞が大部分を占めるのは、呼格機能語が対話者を表しているために当然のことと言える。形容詞及び分詞は修飾語であるが、修飾すべき名詞を伴わず実詞化されて呼格機能語となっている。

それでは呼格機能語が名詞、あるいは実詞化された形容詞・分詞である場合、ゐの使用率に差が見られるだろうか。

次頁<表-3>に於て名詞が呼格機能語である場合のゐの使用率は約50%であるのに対して、分詞・形容詞が実詞化されて呼格機能語となる場合60%を越えている事から後者の場合にゐの使用傾向が指摘されよう。

また分詞の出現数は僅かであるが、その中でゐが付加されない例は見られなかった。

	名詞	形容詞	分詞
ὦが付加された呼格名詞句	165 (51.2)	26 (60.5)	5
ὦが付加されない呼格名詞句	143 (44.4)	15 (34.9)	0
ὦ以外の間投詞を持つ呼格名詞句	14 (4.4)	2 (4.6)	0
合計	322 (100.0)	43 (100.0)	5

下記の引用例に於て、実詞化された分詞は — で示されてある。これらは共に主格と呼格が同形であるために、ὦが付加されなければ主文に於ける主動詞 πειρᾶ・θέλεις の付帯的な状況を表す分詞とも見なすことが可能である。ὦの付加は、このような曖昧さを避けて、修飾すべき名詞を伴わない分詞が、呼格機能語として主文から独立した呼掛けの表現を為していることを、一層際だたせていると考えられる。換言するならば単に呼格名詞句に付加されるだけでなく、主文から呼掛けの表現を分離し明らかにする機能を持つと言えるだろう。

ὦ πάντα τολμῶν κἀπὸ παντὸς ἂν φέρων
λόγου δικαίου μηχανήμα ποικίλον,
 τί ταῦτα πειρᾶ κἀμὲ δεῦτερον θέλεις
 ἔλειν, ἐν οἷς μάλιστ' ἂν ἀλοίην ἄλους; OK761-4

「おおどんな事にも臆せずどんな事からも正当の権利の主張なるものをこざかしく作り出す男め。どうして俺にこのようにしかけるのだ。俺がそのうちに捉えられればそれに優るもののない苦しみの中に俺を再び引き込もうとするのだ。」

— --呼格名詞句, ———— --実詞化された分詞

5.3 統語論的分析基準(2)による分析結果

まず初めに呼格名詞句内の構成要素数が単数の場合（すなわち呼格機能語のみ）と複数の場合での $\bar{\omega}$ の出現率を調査した。

<表-4>に於て呼格名詞句構成要素数が複数ある場合に $\bar{\omega}$ の使用率が60%と高く $\bar{\omega}$ が付加されない呼格名詞句との出現率に差が認められることから、呼格名詞句が複数の構成要素から成ると $\bar{\omega}$ の使用傾向が見られると言えよう。

<表-4>

(%)

／構成要素数	単数	複数
$\bar{\omega}$ が付加された呼格名詞句	128 (49.2)	68 (61.8)
$\bar{\omega}$ が付加されない呼格名詞句	125 (48.1)	33 (30.0)
$\bar{\omega}$ 以外の間投詞を持つ呼格名詞句	7 (2.7)	9 (8.2)
合計	260 (100.0)	110 (100.0)

次に構成要素がの複数ある場合に、引用例のような呼格機能語の同格及び重複表現が含まれるため、これらを修飾語を持つ呼格機能語と分けて分析した結果が次頁<表-5>である。

呼格機能語の同格表現

$\bar{\omega}$ σπέρματ' ἀνδρός τοῦδ', ἐμαὶ δ' ὀμαίμονες, OK1275

「この人の子で、私の同腹よ」

—— 呼格名詞句, —— 同格表現

呼格機能語の重複表現

ἀφέλκομαι δύστηνος, ᾧ ξένοι ξένοι OK844

「どうしましょう、引かれて行きます。皆様皆様」

< 表 - 5 >

(%)

／構成要素数	修飾語句		重複	同格
	単数	複数		
ゐが付加された呼格名詞句	31 (64.6)	21 (75.0)	5	11
ゐが付加されない呼格名詞句	15 (34.3)	1 (3.6)	0	17
ゐ以外の間投詞を持つ呼格名詞句	2 (4.1)	6 (21.4)	0	1
合計	48(100.0)	28 (100.0)	5	29

この結果から呼格機能語が複数の修飾語を有する場合ゐの出現率が高いことから、呼掛けの表現が長くなるとゐの使用傾向が指摘できよう。これは主文の枠外にある呼格名詞句の独立性を明示する必要性が高まるとゐが付加され易くなると考えられる。

5.4 統語論的分析基準(3)による分析結果

5.3で触れたように呼格機能語が修飾語を有する場合ゐが付加され易いと言う結果を得た。ここでは修飾語の品詞と呼格機能語及びその修飾語の位置関係を問題にする。但し分析が煩雑になるのを避けるために<表-5>の呼格機能語の修飾語が単数の場合に限定して分析を試みたい。

< 表 - 6 >

(%)

	属格	形容詞
ゐが付加された呼格名詞句	10 (43.5)	21 (84.0)
ゐが付加されない呼格名詞句	11 (47.8)	4 (16.0)
ゐ以外の間投詞を持つ呼格名詞句	2 (8.7)	0 (0.0)
合計	23(100.0)	25(100.0)

呼格機能語の修飾語には、実詞の属格及び形容詞が挙げられる。〈表-6〉によると修飾語が形容詞の場合に $\bar{\omega}$ の使用率が高いことが認められる。これは、修飾語(形容詞)が含意する話者の主観的感情を $\bar{\omega}$ が高めているとするScott(1904 p.83ff)の記述を確証する結果と言えると思われる。

次に呼格機能語とその修飾語の位置関係による $\bar{\omega}$ の分布を調べた。(〈表-7〉)

〈表-7〉

	呼格機能語 + 修飾語		修飾語 + 呼格機能語	
	属格	形容詞	属格	形容詞
$\bar{\omega}$ が付加された呼格名詞句	7	7	3	14
$\bar{\omega}$ が付加されない呼格名詞句	7	2	4	2
$\bar{\omega}$ 以外の間投詞を持つ呼格名詞句	0	0	2	0
合計	14	9	9	16

この分布状況を見ると、形容詞が呼格機能語に前置される場合、呼格名詞句に $\bar{\omega}$ が付加された例が見られる。出現用例数が限られているために断言は避けるべきだが、修飾語が形容詞でこれが呼格機能語に先行するときに $\bar{\omega}$ が付加される可能性があると言えるように思われる。

5.5 統語論的分析基準(4)による分析結果

呼格名詞句の位置は、従来次のように記述されている。

『呼格は文章の初めに用いないのが普通である。(中略)しかし尋常の調子でないときには、文首に用いることもある。』²⁾

ここでは Sophocles に於いて文及び行に於ける呼格名詞句の位置と $\bar{\omega}$ の関係を分析することにする。尚、分析に際して考慮されるべき点を挙げておく。まず文に於ける分析には会話・合唱の両部分を対象とするが、行による位置分析には合唱部分を除く。これはテキストによって合唱部分の行表記に異同が見られるためである。次に呼格名詞句が主文の構成要素により分離切断されている例は除外する。また次のように行と文では呼格名詞句の位置が異なることを注記しておきたい。

<行頭・文末の例>

ἅπαξ τὰ τοιαῦτ', οὐχὶ δις χρήζω κλύειν
ὦ πρέσβυ. (統行) OK1208-9

<行中・文末の例>

ἐπίσχεσ ἀυτοῦ, ξεῖνε. (統行) OK856

<行末・文中の例>

παίδων δὲ τῶν μὲν ἀρσένων μή μοι, Κρέον,
προθη μέριμνα. (統行) OT1459

(a)文に於ける位置分析

上記の考慮すべき点を踏まえた上で 365例を分析した<表-8>によると呼格名詞句が文頭にある場合の付加された例の出現率がをを持たない例の出現率を僅かながら上回る。しかし文中に於けるのの使用分布との間に大きな差が見られないことから文に於ける呼格名詞句の位置との付加との関連性を導き出すには至らなかった。

<表-8>

(%)

	文頭	文中	文末	一文
が付加された呼格名詞句	70(57.4)	87(49.2)	26(47.3)	9
が付加されない呼格名詞句	41(33.6)	85(48.0)	29(52.7)	2
以外の間投詞を持つ呼格名詞句	11(9.0)	5(2.8)	0(0.0)	0
合計	122(100)	177(100)	55(100)	11

(b)行に於ける位置分析

行に於ける位置に関して会話部分の用例 279例の分析を試みた。次頁<表-9>によると、行頭の呼格名詞句がある場合の付加傾向が認められる。これに対して行末に於いてはが用いられ難いと言えるようだ。

悲劇に於いて行頭が最も強い強調の位置であることを考え合わせると、この位置にある呼格名詞句に付加されるは、単なる呼格名詞句の付属物ではなく、呼掛けの表

現上の印象を強める機能があると考察されよう。但しこの考察には文脈による客観的分析が更に必要とされることを断わっておきたい。

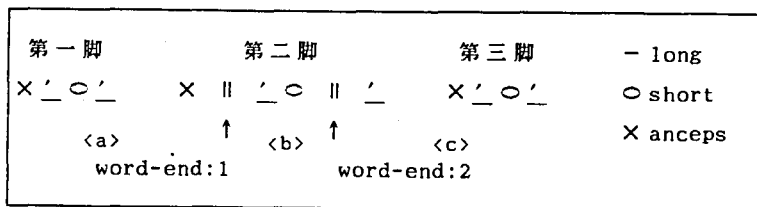
<表-9>

(%)

	行頭	行中	行末	一行
ゐが付加された呼格名詞句	55(63.2)	72(55.4)	14(27.5)	10
ゐが付加されない呼格名詞句	29(33.3)	58(44.6)	37(72.5)	1
ゐ以外の間投詞を持つ呼格名詞句	3(3.5)	0(0.0)	0(0.0)	0
合計	87(100)	130(100)	51(100)	11

次に<表-9>に於いて行中に出現した130例の呼格名詞句の位置を、更に word-endにより分け、分析を加えることにする。下記の図は一行中のword-endを示している。

iambus trimeter ³⁾



この図に於いて、<a>はword-end:1で呼格名詞句が終わる範囲を表す。(但し行頭は含まない。) は呼格名詞句がおかれる範囲がword-end:1から:2であることを示し<c>はword-end:2から呼格名詞句(ゐが付加される場合はゐ)が始まることを示す。(但し呼格名詞句が行末で終わる用例は除かれる。)尚、分析上の煩雑さを避けるために呼格名詞句が呼格機能語のみから構成される場合を分析対象とする。

次頁<表-10>に於いて、呼格名詞句がword-end:1の前後、換言するなら三脚目よりも行頭に近い位置におかれる場合ゐが付与され易いと言えるだろう。また、<表-9>の分析結果を踏まえるならば、行頭からword-end:1までの範囲に呼格名詞句があるとゐの使用傾向が指摘できる。また<表-10>の()は呼格機能語が単音節語である用例数を表している。<a>の範囲の単音節語数を見ると、三脚目の弱音部(arsis)

に単音節の呼格機能語が置かれるとゐが付加されると言うScott (1904 p.81ff) の記述を確認した結果が得られたと言えるだろう。

<表-10>

() は呼格機能語が単音節語

	<a>		<c>	その他
ゐが付加された呼格名詞句	26 (20)	20 (5)	5 (3)	12 (3)
ゐが付加されない呼格名詞句	13 (5)	14 (0)	5 (0)	3 (0)
ゐ以外の間投詞を持つ呼格名詞句	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
合計	39 (23)	34 (5)	10 (3)	15 (3)

6. 結論

5. に於ける分析から得られたゐの用法及び機能は次のごとく整理される。

1)呼格機能語が実詞の場合には小辞ゐの付加は自由である。これに対して形容詞・分詞が実詞化され呼格機能語となる場合、ゐが付加され易い。これは特に分詞の場合呼格名詞句を主文から分離させ呼掛けの表現を明示する機能がゐにあるためと考察される。

2)呼格名詞句を構成する要素が複数ある場合、及び呼格機能語が修飾語句を有する場合ゐの使用に傾向性が見られる。換言すると呼格名詞句が長いとゐが用いられると言えよう。このことは1)と同様にゐに呼掛けの表現の独立性を高める機能があることを示していると考えられる。

3)呼格名詞句が行頭から三脚目までに置かれるとゐが使用され易い。断言は避けられるべきだが、行頭に近い位置が持つ強調をゐが更に『強調』していると感じられる。またこの結果はゐの付加が韻律と無関係ではないことを示しているように思われる。

本稿で見てきたゐの使用状況はゐが単に呼格名詞句の付属物ではなく、呼掛けの表現を主文から際立たせると言う統語論上の機能を持つことを指摘していると結論づけられよう。最後に、ゐの機能の記述には文脈に置ける意味論的な分析も必要であることを断わっておきたい。

尚、本稿は、1987年に広島大学文学部に提出した「古典ギリシア悲劇に於ける小辞ゐ

と呼格の用法に就いて「ソボクレースの作品を中心に」の一部を要約し加筆したものである。本稿作成にあたり御指導いただいた広島大学文学部の吉川守・古浦敏生両教授及び言語学研究室の諸氏に感謝いたします。

<註>

- 1)高津, p.251
- 2)Schwyzer, p.61f
- 3)Schwyzer, p.61f
- 4)Humbert, p.296
- 5)Wackernagel, p.311 / Humbert, p.296
- 6)Humbert, p.296
- 7)話者が発する呼掛け詞をいう。(『言語学用語辞典』ラルース, 大修館, 1985, p.405)
- 8)田中・松平, p.110 / Schwyzer, p.60
- 9)West, p.40

<参考文献>

- Humbert, J Syntaxe Gregue Librairie C.Klincksieck (1954²) Paris
高津春繁 『ギリシア語文法』 岩波書店 (1960)
『古典ギリシア文学史』 岩波書店 (1977)
- Schwyzler, E Griechische Grammatik II C.H.B (1950) München
- Scott, A "The vocative in Homer and Hesiod" *AJPh* 24 (1903)
"The vocative in Aeschylus and Sophocles" *AJPh* 25 (1904)
- Smyth, W Greek Grammar Harvard University Press (1920) Massachusetts
田中美知太郎・松平千秋 『ギリシア語文法』 岩波書店 (1983)
- Wackernagel, J Vorlesung über Syntaz von Griechisch, Lateinisch und Deutsch
I, Emil Birkhäuser & Cie (1928) Basel
- West, L Greek Metre Oxford University Press (1966) London

<テキスト>

- Sophoclis Fabulae (Oxford Classical Texts 1955⁷)
Sophocles I (The Loeb Classical Library 1946⁴)

<注釈書及び日本語訳>

- Bayfield, A The Antigone of Sophocles Macmillan (1960⁸) London

Dawe, D Oedipus Rex Cambridge University Press (1982) New York
Jebb, C The Oedipus Coloneus (Sophocles, The plays and Fragments II)
Adolf M Hakkert (1965) Amsterdam

呉 茂一 『アンティゴネ』
高津春繁 『オイディプス王』・『コロノスの王オイディプス』
(『世界古典文学全集8』 筑摩書房 (1964))

The usage of the particle δ followed by the vocative phrase
in Sophocles

Traditionally the usage of the particle δ followed by the vocative phrase is described in context of the texts as follows :

In Attic δ is regularly added to the vocative phrase of direct address. By the omission of δ the vocative phrase may express hostility, wrath, grief, contempt, etc.

In this paper, however, I research the usage of δ in Sophocles syntactically in order to describe what function δ may have.

δ tends to be used with the vocative phrase ;

- (1) when an address term (i.e. the vocative) is an adjective and a participle without a substantive.
- (2) when a vocative phrase has more than two constituents.
- (3) when an address term in a vocative phrase has more than two attributives.
- (4) when a vocative phrase stands between the first metron and the third metron in a line, especially when a monosyllabled-address term appears on the arsis of the third metron.

Therefore it is considered that δ is not a mere particle or interjection to the vocative, but δ may also have the syntactic function to distinguish the vocative phrase from a complete sentence.